

## 「過ちと赦し」(マタイ 6:5-15)

2024年10月20日 立川教会礼拝

今日の聖書は山上の説教の真ん中ぐらいに出て来る箇所です。祈りについて主イエスが弟子たちに教えた言葉を伝えています。祈りは自分を越えた存在に対して訴えをしたり、願いを述べたりすることであり、宗教の大切な要素となっています。キリスト教もその母胎であるユダヤ教も祈りを大切にしています。

旧約聖書をひもとくと、その物語の中で祈りを捧げる信仰者の姿が描かれています。その最初の例はイスラエルの父祖アブラハムで、創世記の記事によると、彼は75歳の時に神の言葉に従って、慣れ親しんでいたメソポタミヤ上流にあったハランを離れて、約束の地であるカナンの地のベテルまでやって来ると、そこに祭壇を築いて「主の御名を呼んで」います(創世記12章)。「主の御名を呼ぶ」ということは、神に祈りを捧げ、礼拝することを意味しています。

ずっと後のカナン定着後の時代になると、ハンナという女性が、神殿に行き子供が授けられるように一心に祈る姿が見られます(サムエル上12:10-11)。神はその願いに応じて、ハンナは子宝を授かり、後に祭司・預言者になるサムエルを生むこととなります。サムエルという名前は、「神は聞き給う」という意味です。後のイスラエルの王国時代の物語にも、神の前で祈りを捧げる人々の姿が見られます。例えば、先程、私たちが読んだ列王記の記事は、エルサレムの神殿が完成したときに、ソロモン王がイスラエル全会衆を代表して、神の前に献げた神殿奉獻の祈りの言葉を伝えています(列王記上8:22-53)。この祈りの中で、ソロモンは神の御名を讃えると共に、将来にイスラエルが罪を犯すことがあっても、悔い改めて主に立ち帰るならば、罪の赦しを与えて下さるように祈っています(列王記上8:33-40)。旧約聖書に収録されている150編の詩編は、ソロモンの神殿で献げられた祈りや歌を集めたものですが、その中には懺悔の詩編と呼ばれるものがあります。例えば、詩編32編や51編や130編では、罪を犯したイスラエル人がそのことを主の前に告白して赦しを祈り求めています。

新約聖書では主イエス御自身が祈りに触れて祈りを捧げる姿が描かれています。主はガリラヤのカファルナウムを拠点にして町や村を回って、「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」という神の国の福音を説いたのですが(マルコ1:14-15)、宣教活動の合間には人がいない寂しいところに退いて祈りの時をもっています(1:35; 6:46)。イエス自身が祈りの人であり、その生涯の重要な分かれ道にあたっては、祈りを捧げる習慣がありました。十字架の死を目前とした最後の晩餐では、自身が十字架の死を通してこ

の世を去って父なる神の下に赴くことを知っていたので、この世に残される弟子たちのために長大な祈りを捧げましたが（ヨハネ 17:1-26）、この祈りは教会の伝統では「大祭司の祈り」と呼ばれています。また、逮捕される直前には、主立った三人の弟子たちと共にゲツセマネの園に退いて祈りを献げています。その時に主は、「アッパ、父よ、あなたは何でもおできになります。この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしが願うことでなく、御心に適うことが行われますように」と祈っています（マルコ 14:36）。「この杯」とは迫り来る十字架の死のことであり、それはイエスにとっても出来れば避けたい苦難であったことを示しています。しかし、イエスは最後に、「わたしが願うことでなく、御心に適うことが行われますように」という言葉を付け加えていますので、苦しい運命であっても最終的には受け入れる姿勢を示しています。

このように、祈りを捧げた先人の例は、旧約聖書にも新約聖書にも沢山あるのですが、信仰者が日々の生活の中でそうした伝統をどのように生かしていくかということが大切なので、イエスの弟子たちも信仰者に相応しい祈りの在り方を求めて、イエスにどのように祈ったら良いのか尋ねることになります（ルカ 11:1）。そこで、私たちが今日どのように祈っているのか、または、どのように祈ったら良いのかということを考えて見たいと思います。祈りの本質は神との対話ですが、祈りにも色々な形があります。心の中で見えざる神に祈ることもあれば、公の礼拝において声に出して祈ることもあります。心の中で祈るときは、自分自身や身近な者のために祈ることが多いのですが、教会の礼拝で祈るとき、祈る者は礼拝に参加した会衆全体を代表して、会衆や社会のために祈る内容を言葉に出して祈ります。つまり、礼拝での祈りはとりなしの祈りの性格を持っています。

祈りにはその時に心に浮かぶ事柄を次々に祈って行く自由祈禱もありますし、祈禱書に書かれている定まった祈りを司祭や牧師が読み上げ、会衆がそれにアーメンと唱和する成文祈禱もあります。自由祈禱を大事にする教派もあれば、成文祈禱を重視する教派もあります。成文祈禱はカトリック教会やイギリス国教会のような伝統を重んじる教会の礼拝で献げられることが多いのですが、私たちが属しているプロテスタント教会は自由祈禱を大事にする伝統を持っています。しかし、牧師さんや信徒の人たちが毎週献げる祈りを聞いていると、神への呼び掛けに始まり、感謝や懺悔の言葉があり、様々な願いやとりなしの言葉があり、神への讃美で終わる形が自ずと出来ているような印象を受けます。つまり、自由祈禱も形が定まる定型化の傾向があり、自由祈禱と成文祈禱との差は見かけほど大きくないように思います。

祈りは霊的呼吸であるとも言われます。長年信仰生活を送っている者にとっては祈りは

身についた習慣なので、何をどのように祈るべきかについてことさらに考えることはありません。その時に置かれた状況によって、あるいは、心境によって祈るべき内容は様々に変化するので、その都度、心に浮かんでくることを祈るということになります。しかし、山上の説教の中で主イエスは弟子たちに敢えてどのように祈るべきかということについて教え、最後に、祈りの模範として主の祈りの言葉を示しています。それは当時のユダヤ人たちの間に、熱心な宗教者が陥りがちな問題が現れていたからです。

マタイによる福音書6章5節には、「祈るときにも、あなたがたは偽善者のようであってはならない。偽善者たちは、人に見てもらおうと、会堂や大通りの角に立って祈りたがる。はっきり言うておく。彼らは既に報いを受けている」と書いてあります。当時のユダヤ教指導者たちは、彼らの礼拝所であるシナゴグや神殿で祈るだけでは足りず、街頭でも祈る習慣があったようです。今日のエルサレムの町を歩いていて、街角で祈る人の姿は見かけませんが、嘆きの壁と呼ばれている崩れ残ったかつての神殿の壁の前では、黒い服装をし、黒い帽子を被ったユダヤ教のラビたちが、祈祷書を手にして、体を前後に動かしながら祈りを捧げています。これは2千年前のユダヤ戦争の時に、ユダヤ人にとって最も神聖な場所であった神殿がローマ軍によって破壊されたことを覚え、そのことを悲しんで祈っている訳です。そこには人目につくようなところで祈る姿があります。

また、大分前のことですが、私はイギリスのロンドンからイスラエルのテル・アビブまで飛行機で行ったことがあります。その時にイスラエルへ向かう飛行機の中で、私の隣に座っていたユダヤ人のおじいさんが急に立ち上がって、体を前後に揺らしながら祈りの言葉を唱え始めるのを見たこともあります。多分、毎日行っている定時の祈りを飛行機の中でも行ったということでしょう。二千年前のエルサレムは、今よりもはるかに宗教の影響が強い場所でありましたので、熱心の余りに街頭で声を出しながら祈る人々がイエスの時代にいたということは十分にあり得る事だったと思います。しかし、イエスは彼らのことを「偽善者」と呼んでいます。それは祈りが本来は目に見えない存在である天の神に向けられた言葉であるのに、目立つ場所で祈りをすることによって人々の注意を引き、敬虔な業として賞賛を得る結果となっていたからです。主はここで祈る時は人から見られないように、自分の部屋で戸を閉めて、見えないところで聞いて下さる神に祈るように勧めています（マタイ 6:6）。

ここで、日本語訳聖書で「偽善者」と訳されているヒュボクリテースという言葉は、英語のヒポクリットの基になっている言葉ですが、元々の古典ギリシア語では、舞台上演技をする俳優のことを言うており、否定的な意味は込められていません。古代ギリシアの演

劇は仮面劇であり、舞台上で色々な役を演じる役者は、役割毎に仮面を付け替えて違った人格を演じ分けていました。ヘレニズム期以降、イスラエルにもギリシア文化が広まり、劇場が作られ、演劇がなされるようになります。イエスの出身地であるガリラヤのナザレの近くにセツフォーリスという大きな町がありました。この町はガリラヤ湖畔にティベリアスが建設されるまでは、ガリラヤの中心都市だったところで、立派な都市計画を持ったギリシア風の町並みを備えていました。今日、そこを訪れると発掘されて復元された町の中心部にローマ時代に遡る半円形の野外劇場の舞台が残っています。そこを訪ねたときに、その舞台に立って試しに声を出すと劇場全体に良く響きました。イエスの時代にもそこでは盛んに仮面劇が行われていたことであると思います。仮面は、それを付ける役者自体の人格とは必ずしも一致しません。役者は仮面を付ければ、悪人であっても善い人を演じることも出来るので、イエスは役者を偽善者の代表のように呼びました。そこから、キリスト教会では、ヒュポクリテースという言葉が「偽善者」という悪い意味で使われるようになりました。イエスは祈りや断食や施しといった宗教的な行為を、人の前で行って社会の称賛を得ようとする人々を偽善者と呼んで厳しく批判しました。それは宗教行為が人目を意識した演技になり、売名行為になってしまう傾向があるからです。イエスはファリサイ派や律法学者らを偽善者と呼びましたが、ユダヤ教の指導者だけでなく、イエスの弟子たちや後代のキリスト教徒たちも偽善者になるのは可能性が十分にあったので、イエスは敢えて偽善の問題に注意を促したのだと思います。

また、当時の祈りの実践において、祈りの言葉が長大になり、祈りが延々と続くようなことも起こっていたようです（マタイ 6:7）。これは現代の教会でも起こることで、熱心の余りに次々と祈りの言葉が付け加えられて、祈りが何時までも終わらないようなことが時々あります。まとまった内容のことを祈るためには、ある程度の言葉数が必要であるにしても、果たして祈りが長ければその祈りは聞かれることが多いのでしょうか？祈りは言葉が立派だから聞き入れられるのでしょうか？勿論、そうではありません。祈りが聞かれるのは、そのことが御心に適っているからであり、言葉の量や祈りの長さや言葉の立派さとは関係がありません。また、祈りにおいては、何を祈っても良いのですが、御心に適うことしか聞かれることはありません。

神は何が私たちに必要かということをご存じであるから、必要最小限のことを祈れば良いので、祈りの手本としてイエスが示した主の祈りです。

マタイ 6章 9-13 節のところをもう一度読んでみたいと思います。

「だから、こう祈りなさい。

『天におられる私たちの父よ、  
御名が崇められますように。  
御国がきますように。  
御心が行われますように、天におけるように地の上にも。  
わたしたちに必要な糧を今日与えて下さい。  
わたしたちの負い目を赦してください、  
わたしたちも自分に負い目のある人を赦しましたように。  
わたしたちを誘惑に遭わせず、悪い者から救って下さい。』

この祈りは主の祈りと呼ばれ、信徒たちが覚えて毎週の礼拝で一緒に祈ることを全世界の教会が現在も続けています。私たちも毎週礼拝の中で唱えているのがこの祈りです。「天におられる私たちの父よ」という神に対する呼びかけの言葉の後に、六つの祈願が捧げられるのですが、最初の三つは、神の御名が崇められることと神の国の到来と神の御心の成就を祈っており、神の栄光のための祈りと言って良いと思います。これに対して後の三つの祈願は、生活に必要な糧が与えられることと、罪の赦しと誘惑からの救済を願っているので、私たちの信仰生活のための祈りです。

ここで注目したいのは、第五祈願です。新共同訳では、「わたしたちの負い目を赦してください、わたしたちも自分に負い目のある人を赦しましたように」となっています。「負い目」という表現に原語では、オフエイレーマタというギリシア語が使われています。この言葉は「負債」や「借金」を表しています。つまり、負債のある者が借金を返す責任があるように、過ちを犯して神に対する罪を犯した者はその償いをする責任を負うということで、経済的な負債が宗教的な罪責の譬えになっています。日本の教会で唱える主の祈りでは、「我らに罪を犯した者を赦すごとく、我らの罪をも赦したまえ」となっていますが、これは原語では「負債」となっているところを、意味が良く分かるように「罪」と言い換えています。アメリカの教会で祈られている主の祈りも *debt* (負債) を *trespass* (罪過) と言い換えている場合が多いので、日本の主の祈りの本文も恐らく英語版の主の祈りの影響を受けたものだと思います。

ドイツの教会では、主の祈りを *Vaterunser* (ファーターウンザー) と呼んでいます。それは、宗教改革者のマルティン・ルターが訳した主の祈りの本文が *Vater Unser* (ファーター・ウンザー「私たちの父よ」) という言葉で始まっているからですが、その第五祈願は、聖書の本文の通りに、「わたしたちの負債を赦してください、わたしたちも自分に負債のある人を赦しましたように」となっています。それは、ドイツ語では負債を表す *Schuld* (シ

ユルト) という言葉が、人間の罪責も表すからで、他の言葉に置き換えなくても意味が通じるからです。

第五祈願は、私たちが犯した過ちによって神に対して負っている罪責(罪の負い目)の免除を願っています。罪とは神の御心に適わない思いや言葉や行いによって、神との関係が壊れることです。創世記の初めの方にある楽園追放の話を思い起こしてみると、そこでは人類の始祖であるアダムとエヴァが、食べてはいけないとされた禁断の木の実を食べる罪を犯したために、エデンの園から追放されています(創世記 3:1-24)。神との関係が壊れた人間が、どのようにして神の下に立ち帰るのかということが、旧新約聖書全体を貫く中心主題となっています。

罪とは神に対して犯す不信行為であるので、人間の罪を赦すことができるのは神以外にはありません。旧約聖書の時代から信仰者たちは、罪を犯すたびに、その責任を感じて神の前に懺悔して、赦しを願い求めることを繰り返してきました。主イエスは、弟子たちに自らを振り返って、思いと言葉と行いを通して神の前に過ちを犯さなかったかどうか吟味し、率直に自分自身の過ちを率直に認めて告白し、赦しを願い求めることを勧めています。私たちが一日の終わりに心を静めて一日を振り返って、神の前に祈りを献げる時に、「神様、今日はこんなことを達成しました」と誇るような思いになるのでしょうか？むしろ、自分が十分でなかった。思いと言葉と行いにおいて神の御心に適わないことを行ってしまったという思いの方が強いのではないのでしょうか。神の前に祈るとき、与えられた一日を神の導きによって過ごすことが出来たことの感謝と共に、自ずと自分の足りなさを懺悔し、赦しを願うということになるのではないかと思います。

主の祈りの第五祈願は、神に対して犯した罪の赦しを願うことには、自分自身に対して他人が犯した過ちを赦すということを伴うことを示しています。直ぐ後の 14-15 節のところにはっきりと述べられているように、人の過ちを赦さない者は神に対して自分が犯した過ちの赦しを願う資格がないからです。信仰は神を信じることであり、誰も自分の代わりになることは出来ないし、信仰を誰も奪い取ることは出来ません。祈りは神を信じる信仰の一つの表現ですが、この世の中で過ごす日常生活の在り方と無縁ではありません。信仰生活と社会生活は違った事柄ですが、両者は無関係ではなく、両者を切り離すことは出来ません。それは、神が私たちのこの世の生活において御心に適ったことを行うことを求めておられるからです。そのことを問題にしたのは、旧約聖書の預言者たちで、例えば、預言者のイザヤは、神殿でどんなに盛大な祭儀を献げても、社会生活において賄賂を取ったり、不公正なことを行ったり、弱い者を虐げるようなことをしているのなら、神はそのような

者が捧げる礼拝を喜ばず、献げられる祈りにも耳を傾けないと語っています（イザヤ 1:10-17）。

主の祈りにおいては、祈る者は、神に赦しを願う前提として、自分に対して過ちを犯した者を赦すよう求められています。しかし、自分に対して悪いことをした者を赦すことは実際には簡単なことではありません。この点は、世々の信徒たちが十分に実践することが出来ていないことの一つだと思います。人間は理性だけでなく、感情を持っています。問題の解決のためには、怒りを抑えて相手を赦し、仲直りすることが必要だと分かっているも、心はなかなかそうした準備が出来ないというのが、実情ではないかと思います。イエスの弟子の一人ペトロは、あるときイエスに、「主よ、兄弟がわたしに対して罪を犯したなら、何回赦すべきですか？七回までですか」と尋ねています（マタイ 18:21）。人を赦すのがなかなか難しいという現状を踏まえた質問であると思いますが、イエスは、「七の七〇倍までも赦しなさい」と答えています。「七の七〇倍赦す」とは、赦すのは490回までで491回目からは赦さなくて良いという意味ではなく、赦しに限りはなく、何回であっても赦しなさいという意味だと思います。これは人間の心の現状を越えた高い理想であるように見えます。しかし、そう教えたイエス自身がそれを実践しています。イエスの宣教者としての生涯の終わりは、敵対する人々によってエルサレムで逮捕され、裁判に掛けられ、十字架刑に処せられることですが、十字架の上でも敵に対する復讐ではなく、赦しを語り続けました（ルカ 23:34）。

イエスの教えに従う者は、たとえ人情としては難しくても、他人を赦す努力を続け、少しでも理想に近づくように招かれています。そこで大切なのは、私たちは自分たちが罪を赦されていると感じるからこそ、他人の過ちも赦すことが出来るようになるということです。神が私たちの罪を赦すのは、私たちが善い人間であるからではなく、御子キリストの十字架の故に私たちの罪を赦すのだということです。私たちは自分たちが相応しくない者であるにも拘わらず、恵みとして罪を赦されていることを実感するならば、自分の罪を認めて悔い改めることも出来るし、他人を赦す気持ちも自ずと生じて来るのではないのでしょうか。

祈りは神の前に自分自身の在り方を振り返り、反省するということを伴っています。そして礼拝の場で神の前に出て祈ることは、毎日の社会生活の中での自分と他の人々と和解し、平和に過ごすということの意味します。このことを念頭において、これからも主の祈りを共に唱えていきたいと思います。